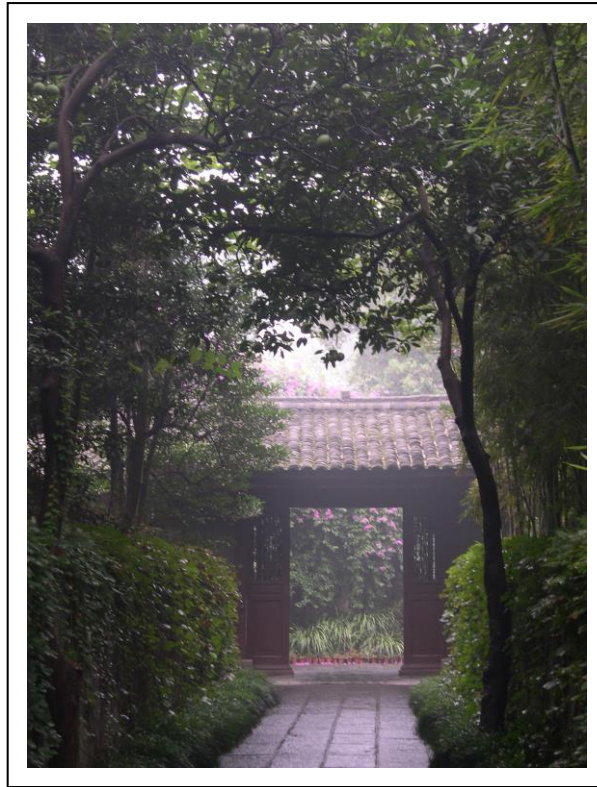


オンライン ISSN 2435-7707

拓 蹊

第 4 号



広島中国近代史研究会

2023年3月24日

【編集後記】

2020年に本誌第3号を電子版として発行してから、すでに3年経った。この間、広島中国近代史研究会のメンバーにもいろいろなことがあった。だが、やはり特筆すべきことは、2020年に入り日本でも流行が本格化した新型コロナウイルス感染症の影響のため、中国大陸・台湾への渡航が不可能となり、国内の移動さえ制限されたことだろう。

たしかに海外の史料や研究者ともオンラインによって繋がることは可能であり、新たなコミュニケーションツールの活用により、研究を深化させるうえで、いままでにない可能性も生まれた。僕自身もその便利さを実感している。

ただ歴史学を学ぶ者として、生の史料を直接読むことができないことは、辛い。そして国内外の研究者との対面による「対話」のもつ意味を再確認した3年になった。

今回の『拓蹊』には、布川弘さんが中国放送（RCC）を通じて行った市民向けのラジオ講座を文字起こしして収録した。これは広島大学総合科学部のプロジェクトとして、水羽が2022年度に行った「アジアのなかの広島と長崎Ⅱ：冷戦と平和に関する総合的考察へむけて」の成果である。

中国近代史との直接の関係は薄いだが、原爆投下という事実は、中国を含む世界の歴史にとって大きな意味をもったものであり、布川さんも日中戦争を踏まえて議論している。その意味で掲載する意味もあろうと考えて（無理やり）納得した。が、卒直に

いえば、相応の分量になる本稿をインターネット上で、しかも国立情報学研究所のCiNii Articlesなどから、検索できる形で公開したい、というのが最大の目的だった。

掲載前には、金子肇さんと丸田孝志さんから貴重なご意見をいただいた。それを十分に行かせたか否かは、読者の判断に委ねざるをえないが、お二人にはとても感謝している。ただし、最終的な文責は水羽にある。

布川さんが逝ってから2022年の9月で丸3年経った。布川さんとの出会いと別れが、故郷である広島に研究者として向き合う契機となった。とはいえ、「ヒロシマ」や平和については、さまざまな要素が絡み合い、僕のような門外漢の立ち入るべき問題ではなく、居心地の悪さを感じ続けてきた。僕が関わることへの違和感を持った人も、少なからずいただろう。

だが、布川さんの残した仕事との直接的な対話は、本稿で一つの区切りがつくことになる。僕としては、『拓蹊』第3号の小特集とあわせ、若い読者が布川さんの仕事を継承していってくれることを切望している。

（水羽信男）

拓蹊 第4号

2023年3月24日発行

編者：広島中国近代史研究会
739-8521 東広島市鏡山1-7-1
広島大学総合科学部
水羽信男 研究室内